

□ \*文系第一問 理系第一問と共通 ただし、理系は一問(問三)減

問一

(ア) 粹 (イ) 概 (ウ) 範 (エ) 朗朗 (オ) 緊迫

問二(解答欄 一四センチ×四行)

若いころ百科事典の執筆をした際に、厳格な字数制限の中で、わかりやすく無駄のない的確な表現を取ることが要求され、後に思い返すとそれが文章作成のよい訓練になったということ。

問三(解答欄 一四センチ×四行)

音読に耐える文章の要素であるリズムを単なる一定の韻律と解し、詩としての条件を全く満たさない文章を強いて定型の韻律にのせると、詩でも散文でもない中途半端で低俗な文章になるということ。

問四(解答欄 一四センチ×五行)

文章表現は意味伝達に終始するものではないので、意味だけ分かりやすく現代語訳した『平家物語』では、原文の響きやリズムとそれによって読者が感得する緊迫感といった文章の感興が完全に失われ、言葉の働きの多くを喪失していることが理由である。

問五(解答欄 一四センチ×七行)

簡易な内容を過剰に修飾し、無理に表現を屈曲させるのを「文学的表現」と難ずるのは、文学が内容伝達だけでなく言葉の全機能の発揮を最重要視することを知らないからであり、分かりやすいだけでよいと考えるのは、文章表現を工夫した経験がなく、言葉の働きの本質が意味伝達だけでないと気づいていないからである、というのが理由である。

問一（解答欄 十四センチ×四行）

我々は、感情を自己に固有の内在的なものだと思いきこんでいるが、自然の微小な一部として存在する人間の感情は、自然のある光景に喚起され、同調し、投影することで生じたものであるということ。

問二（解答欄 十四センチ×四行）

過酷な癌診療に真摯に携わり、信頼していた年下の医師が癌で死んだ日、平静を装う筆者の様子に隠せない動揺を感じたせいも、患者からの病状申告が少なく、普段よりも診療が迅速に進んだということ。

問三（解答欄 十四センチ×五行）

未来は、現在を生きる人間の想念の中で想像されるものでしかないの、進行癌で入院し死期が近いと思われる友人にとってもそうではない自分にとっても、死を含めて未来が不確定であることは客観的な事実として変わりがないと思われるということ。

#### 問四

A（解答欄 十四センチ×三行）

通夜の日の激しい狼狽からは脱したものの、葬儀で彼の死という冷徹な事実を認めると、索漠たる喪失感にとられ、さらなる痛恨の思いを抱いている。

B（解答欄 十四センチ×四行）

弔いの言葉を通して彼の生を精一杯見つめることで気持ちの整理がつき、彼の死を、自然に抱かれ生きていた人間が再び自然に還る営みとして、安らかで静穏な気持ちで受けとめられるようになっていく。

## 問一

たとえ冷泉殿に女の童として仕えていすばらしい幸福を得たとしても、世の中の無常な有様を考えあわせると、何につけても安心できることもないようだという事。

## 問二

父上が指図なさるようなことに、私はどうして背き申し上げましょうか、いや、決して背き申し上げません。

## 問三

お前は最近髪を洗ったばかりであるのに。また洗うのは変だなあ。

## 問四

女の童が出て行ったときり帰って来なかつたので、冷泉殿は気掛かりに思つてその理由を尋ねると、女の童はしばらくの間はごまかしていたけれども、何日か経つと、女の童が父の元で尼になつたことがはっきりしたということ。

## 問五

五歳の時から我が子同然に育てた女の童が何も事情を言わずに出て行ったのは恨めしいけれども、別れ際に引き返して冷泉殿の顔を見つめて女の童が出て行ったのは、別れを悲しむ気持ちがあつたのだと心打たれている。